詐欺師と勇者

森野カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
詐欺師と勇者

【Ｎコード】
Ｎ１２９１ＢＡ

【作者名】
森野カエル

【あらすじ】
勇者の証が欲しい。村長に言われた言葉を聞くしかなかった・・・。（自サイトより）

急な山道に息があがる。
小雨の中を無理に歩いて来た事も、余計に体力を奪う原因となったようだ。
しかし、どこかで雨宿りしている時間もない。
明日までに証が欲しいと言われた。

『山頂近くの神殿に、竜の涙という宝物がある。それを勇者の証としようじゃないか』

滞在している村の村長は、ニヤニヤと笑いながら言っていた。
村長はきっと気付いている。
俺が勇者の名を騙った詐欺師だと。
勇者を名乗れば、どこの村も歓迎してくれた。
美味しいごちそうに暖かい寝床。
いつも最高の待遇だった。

「くそっ、何でバレたんだ」

今までバレた事は一度もなかった。
勇者としての思い出を、適当にでっち上げて話していれば、村人は満足して喜んでいた。

「神殿は、まだか」

かなり山は登ったはずだ。
雨もようやく上がった。
小雨とはいえ、長時間雨にあたっていたので、服はびっしょりと濡

れていた。
濡れた服は重く、余計に足取りが遅くなる。
このまま、逃げてしまいたい。
何度も何度もそう思った。
けれども、それは許されない。
旅仲間が人質に捕らえられているのだ。
道の先の方が開けてくる。あの先に神殿があるのだろうか？
もう体力の限界だった。
早く竜の涙を手に入れ、村に帰りたい。
ようやっと登り終えた先に待っていたのは、神殿ではなかった。
巨大な体躯。
身体を覆う鈍く光る鱗。
大きく裂けた口からいくつも見えるするどい牙。

「何でこんな所に」

誰もが恐れる最強のモンスター。

「ドラゴンが！」

死んだ。
これは死んだ。
俺は勇者でも何でもない。ただの詐欺師だ。
小物ならまだしも、ドラゴンになど勝てるはずがない。
呆然と立ち尽くす前で、ドラゴンの身体が傾いだ。
もうダメだ。
死を覚悟した。

「うわあああぁぁぁぁ！」

とっさに頭を抱え込んだが、予想した痛みは来ない。
変わりに地響きが身体に伝わる。

「あれー？村の人かな？危ないから来ちゃダメって言っといたじゃない」

のんきな声がして、ゆっくりと顔を上げる。
そこには、血に染まった長剣を持った青年が立っていた。
その後ろで、先ほどのドラゴンが倒れていた。

「た、助かった」

安堵したと同時に、目の前が真っ暗になった。
そこから先は覚えていない。

目が覚めた時、一番始めに目に入ったのは旅仲間の顔だった。

「良かった！やっと起きた！」

ゆっくりと身体を起こす。

「ここはどこだ？」

自分は暖かいベッドの上に寝ていた。
周りを見回す。
そこは、ベッドが一台あるだけでいっぱいになってしまうような、狭い部屋だった。

「ここは村です。本物の勇者に担がれてあなたは戻って来ました」

そうか、あの青年は本物の勇者だったのか。
本物の勇者に先に会っていたから、村人は騙されなかったのだ。

「その勇者はどうした？」
「ドラゴンを倒したお祭りに出ています」

そういえば外が騒がしい。

「よし、逃げるぞ」

祭りで騒いでいる今が逃げるチャンスだ。

「準備はしてあります」

さすが俺と長い間旅をしていただけはある。
用意周到だ。
二人でこっそり部屋を出て、見つからないように家の裏側に出る。
全ての村人が祭りに参加しているのか、辺りに人の気配はなかった。

「お祭りは、村の広場で行われています」

ならば、広場とは反対側から逃げれば良い。
こそこそと裏道を通り、誰にも見つからず村を出る事に成功した。

「ああ、大変な目に合った」

抱えていた荷物を下ろし、ぐっと伸びをする。
まさか本物の勇者がこんな所にいるとは思わなかった。
この近辺では、勇者の名を騙るのは控えた方が良いだろう。

「あれれ？どこに行くのかな？」

ごく最近に聞いた事のある声が後ろからする。
振り返りたくない。

「勇者と名乗ってやりたい放題していたのって君達だよね」

汗が頬を伝う。
最悪な事態となった。
役人に突き出されるのか、それともこの場で成敗されるのか。
ここは先手に出るべきだ。
覚悟を決め振り返り、腹の底から叫ぶ。

「申し訳ございませんでした！ちょっとした出来心だったんです！
もう致しません！」

額を地面に擦り付け、勇者の足元で土下座した。
後ろで仲間も土下座している。
息はぴったりだった。

「うーん、どうしようかなあ？」

相手は勇者だ。
謝っている人間をいきなり切りつけたりはしないだろう。

「実は俺、荷物持ちが欲しかったんだよね」

ちらりと顔を上げる。
荷物持ちをすれば許してくれるという事だろうか？

「どうする？」

勇者がニヤリと笑う。

「はい！やらせて頂きます！」

荷物持ちで許してくれるなんて、なんと心の広い人だ。

「じゃあ今日から君達は俺の荷物持ちね」

「はい！」

喜んでいた二人だったが、役人に突き出された方が、何万倍もましだった事を知るのはまだ先となる。

ｅｎｄ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1291ba/

詐欺師と勇者

2012年1月3日03時49分発行